

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	第11回東邦大学医学部佐倉病院内科学講座例会および第8回東邦医学会佐倉内科分科会
別タイトル	11th General Meeting of the Department of Internal Medicine, Sakura Hospital, Faculty of Medicine, Toho University and 8th Subcommittee Meeting of the Medical Society of Toho University
公開者	東邦大学医学会
発行日	2016.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 63(1). p.60 67.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会抄録(分科会)
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD57060538

学会抄録 (分科会)

第 11 回東邦大学医学部佐倉病院内科学講座例会 および第 8 回東邦医学会佐倉内科分科会

2015 年 11 月 29 日 (日) 10 時～17 時 40 分
ホテルニューオータニ幕張 (2 階 ステラ)

開会の挨拶 鈴木康夫教授 (10:00～10:10)

第 I 部 学内研究発表 (発表 5 分, 討議 3 分) 10:10～10:50

座長 熊野浩太郎, 中村健太郎

A グループ (呼吸器・免疫・アレルギー)

1. Anaplastic lymphoma kinase (ALK) 陽性肺癌における治療の最前線

吉田 正

Anaplastic lymphoma kinase (ALK) 融合遺伝子陽性肺癌はさまざまな臨床的特徴を有し, ALK 阻害薬が劇的に奏功する. 特に第 2 世代以後の ALK 阻害薬は過去に例をみない良好な成績が報告されている. しかし, その頻度は肺腺癌全体の約 4% 程度に過ぎず, 診断には困難も多い. 当院では, 内科, 外科, 病理, 放射線科の協力により ALK 肺癌の診断に総力を挙げて取り組み, 現在までに 8 例もの症例を提出した. ALK 肺癌を中心に肺癌治療の最前線を報告する.

B グループ (糖尿病内分泌代謝)

1. オキシステロールによる骨芽細胞様 MC3T3-E1 細胞への細胞内 reactive oxygen species (ROS) 制御を介したアポトーシス誘導とその作用メカニズムの検討

佐藤悠太

2 型糖尿病患者では骨密度非依存性の骨折リスクの存在および骨質の脆弱性が示唆されている. このメカニズムについては定かではないが, 2 型糖尿病患者ではオキシステロールによる酸化ストレスが高く, それが骨質の脆弱性を起こしている可能性があると考えた. そこで, オキシステロールの代表産物である 7-ケトコレステロール (7-ketocholesterol: 7KC) を用いて骨芽細胞様 MC3T3-E1 細胞のアポトーシスと細胞内 reactive oxygen species (ROS) 制御などについて検討を行ったので報告する.

C グループ (循環器)

1. Effect of nicorandil administration on arterial stiffness monitored with cardio-ankle vascular index (CAVI) after coronary intervention

佐藤修司

安定狭心症患者において, 冠動脈形成術直後から nicorandil 持続静注を行い, cardio-ankle vascular index (CAVI) と循環動態の変動を観察した. 結果, control 群と比較し, nicorandil 投与群において有意に CAVI の改善を認めた. また, CAVI と既知の循環指標の変動は有意に相関した.

D グループ (消化器)

1. 当院における潰瘍性大腸炎に対するタクロリムス治療の現状

古川竜一

2009年7月7日、潰瘍性大腸炎治療に対して新たな選択肢となる、タクロリムスが保険適応となった。1984年、筑波山麓の土壌から分離された新しい放射菌 *Streptomyces tsukubaensis* の代謝産物に強力な免疫抑制効果のあることから開発が行われ、日本から発信された免疫抑制剤である。当院におけるタクロリムス治療の歩み、現状を報告する。

E グループ (神経内科)

1. アマンタジンはパーキンソン病および血管性パーキンソニズム患者の下部尿路機能障害および夜間多尿において有用である

館野広美

アマンタジンはパーキンソン病および血管性パーキンソニズム患者の治療薬の1つである。これらの患者においてアマンタジン投与前後での排尿障害について評価したところ、アマンタジンは従来報告されてきた運動機能障害だけでなく、下部尿路症状や夜間多尿に対し有用であることが示された。

第 II 部 前期 1 年目研修医 (発表 5 分, 討議 3 分) 11:00~12:10

座長 高田伸夫, 川嶋健吾

1. 食道の極度右変移を認めた S 字型食道アカラシアの症例

新井基朗

指導医: 佐々木大樹 (D グループ)

60代女性。頻回の血性嘔吐を主訴に救急外来受診。Gastrointestinal fiberoscope (GF) 施行し、食道裂傷、食道の著明な拡張、esophagogastric junction (EGJ) 付近での狭窄を認めた。その後検査にて食道の極度右変移を認め、operation (OPE) 的治療介入を要した1例を経験したので報告する。

2. 急速増大傾向を示した高齢発症の巨大嚢胞性 gastrointestinal stromal tumor (GIST) が疑われた 1 例

城築裕香

指導医: 山田哲弘 (D グループ)

80代男性。食欲不振、腹満にて受診。腹部 computed tomography (CT) にて 20 cm 大の上腹部嚢胞性腫瘤を認めた。1カ月の経過で腫瘤が 25 cm 大に急速増大傾向を示し治療介入を要した。胃 gastrointestinal stromal tumor (GIST) が疑われた1例であり報告する。

3. CD4/8 比上昇を認めた過敏性肺炎の 1 例

園川卓海

指導医: 早川 翔 (A グループ)

74歳女性。咳嗽、呼吸困難を主訴に近医受診。Computed tomography (CT) 所見から過敏性肺炎が疑われ、精査目的で当院へ紹介となった。入院後の画像検査および気管支鏡検査での CD4/8 比の上昇から夏型以外の特殊な過敏性肺炎と考えられた症例を文献的考察を加えて報告する。

4. 右舞踏様運動で発症した左線条体梗塞の 1 例

大串雅子

指導医: 露崎洋平 (E グループ)

74歳女性。突然右上下肢の不随意運動が出現した。来院時は右上下肢の舞踏様運動を呈していたが、それ以外の神経学的異常所見は認めなかった。頭部 magnetic resonance imaging (MRI) 上左線条体に梗塞を認めていた。同部位での右舞踏様運動はまれであり、文献的考察を加え報告する。

座長 岸 雅彦, 飯塚卓夫

5. めまい精査にて肺小細胞癌が指摘され、腫瘍随伴症候群が疑われた1例

田杭千穂

指導医：力武はぎの (A グループ)

70歳女性。めまいのため他院入院中に肺小細胞癌と診断され当院紹介。右上葉腫瘍，リンパ節転移あり，脳・骨転移なし。化学放射線療法を開始すると腫瘍縮小とともにめまいも改善し，腫瘍随伴症候群が疑われた。

6. 複数の鑑別診断から非機能性パラングリオーマの診断に至った腹部腫瘍の1例

田波未佳

指導医：渡邊康弘 (B グループ)

69歳女性。2型糖尿病で近医通院中。腹部超音波検査で腹部大動脈左側に約3cm大の腫瘍を指摘された。入院精査で非機能性パラングリオーマと診断し腫瘍摘出術を施行した。腹部腫瘍の鑑別なども含めて考察する。

7. 若年女性の悪性高血圧の1例

長尾映里

指導医：清水一寛 (C グループ)

42歳女性。発作性上室性頻拍症にて当院受診。その際，頭痛を伴う重症高血圧，body mass index (BMI) 29の肥満，HbA1c 10.0の糖尿病も併発していた。若年でありながら血管病の進行した症例を経験したので報告する。

8. トルバプタン投与によって、内服治療のみで重症体液貯留の管理に成功したうっ血性心不全の1例

川地杏奈

指導医：清川 甫 (C グループ)

41歳男性。急激な体重増加を認め肥満治療のため当院糖尿病・内分泌代謝センター受診。心エコー上低心機能，起坐呼吸認め当院循環器内科に入院となった。体液貯留の管理のためトルバプタン投与開始し，内服のみで速やかに症状改善した重症心不全の1例を経験したので報告する。

第 III 部 学位表彰 12:10~12:20 授与 龍野一郎

表彰

松澤康雄 乙第2687号

Change in serum marker of oxidative stress in the progression of idiopathic pulmonary fibrosis

(特発性肺線維症の進行における血清酸化ストレスマーカーの変化)

Pulm Pharmacol Ther 32: 1-6, 2015

第 IV 部 前期2年目研修医発表 (発表5分, 討議3分) 13:00~13:20

座長 竹内 健, 高橋真生

1. 柴苓湯による薬剤性間質性肺炎の1例

中村祥子

指導医：松澤康雄 (A グループ)

72歳女性。呼吸苦にて当院来院。低酸素血症と両側スリガラス影を認めた。病歴・気管支鏡・drug induced lymphocyte stimulation test (DLST) にて柴苓湯による薬剤性間質性肺炎と診断。ステロイド投与にて軽快した。「証」との関連，既報71例への考察を加えて報告する。

2. Pelvic congestion syndrome (PCS) の疼痛コントロールに対して漢方薬が有効であった 1 例

木村道明

指導医：粕谷秀輔（放射線科）

44 歳女性。長年下腹部痛で家事もままならない状態であった。骨盤内うっ血症候群（pelvic congestion syndrome：PCS）が疑われ、カテーテル治療目的で当院紹介となった。待機的療法として桂枝茯苓丸を投与したところ、疼痛時間が短縮し activities of daily living（ADL）の向上が得られた。

第 V 部 学外研修医発表（発表 5 分，討議 3 分）13：20～13：30

座長 竹内 健，高橋真生

1. Empty sella を呈した視床下部性副腎不全の 1 例

いすみ医療センター 田中 翔

70 歳女性。嘔吐，食欲不振で当院に来院。低 Na 血症・低血糖を認め，4 者負荷試験・adrenocorticotrophic hormone（ACTH）連続負荷試験にて視床下部性副腎不全の診断となる。下垂体 magnetic resonance imaging（MRI）では empty sella を呈しており視床下部性副腎不全との関連を文献を交えて考察する。

第 VI 部 後期 3 年目研修医発表（発表 5 分，討議 3 分）13：30～14：10

座長 清水一寛，青木 博

1. 部分肺静脈還流異常を偶発された chronic obstructive pulmonary disease（COPD）の 1 例

伊藤拓朗

指導医：桑原良成（A グループ）

70 歳男性。冠攣縮性狭心症で近医にて加療中。Brinkman index（BI）750 程度の喫煙歴あり。2 週間前からの発熱・咳嗽・喀痰にて当院受診。採血にて炎症反応高値，心エコーにて肺高血圧症，computed tomography（CT）にて肺気腫，右下肺野の浸潤影，左肺静脈から腕頭静脈への還流異常を認めた。肺炎による chronic obstructive pulmonary disease（COPD）急性増悪，部分肺静脈還流異常の診断となり入院治療となった。成人まで指摘されてこなかった先天性心疾患の 1 例を経験したため報告する。

2. エルロチニブが奏功した epidermal growth factor receptor（EGFR）遺伝子変異陽性肺腺癌脈絡膜転移の 1 例

岩川幹弘

指導医：松澤康雄（A グループ）

64 歳女性。右眼の視野異常を契機に当院眼科受診し，右転移性脈絡膜腫瘍を指摘。全身検索の結果，肺・小脳・肝・骨などにも多発性病巣あり。胸部 computed tomography（CT）右肺 S8 の腫瘤影に対し経気管支肺生検施行し，脈絡膜転移を伴う原発性肺癌（cT4N2M1b stage IV）と診断した。Epidermal growth factor receptor（EGFR）exon19 遺伝子変異が存在したため，first line でエルロチニブを投与したところ奏功し，視野異常の改善および原発巣の縮小を認めた。EGFR の遺伝子変異を有する肺癌脈絡膜転移に対し，エルロチニブの有用性を認めた 1 例を経験したので報告する。

3. 低心機能患者の静注強心薬からの離脱時における経口強心薬ピモベンダンの使用経験

杉崎雄太

指導医：飯塚卓夫（C グループ）

56 歳男性。うっ血性心不全で入院。入院後 dopamine（DoA）開始し，離脱困難となったが，ピモベンダンの内服により臨床症状の改善を認め，DoA を中止することができた。重度の心機能低下においては，1 度カテコラミン依存状態になるとその離脱に難渋することはしばしば経験されるが，今回静注強心薬からの離脱時に経口強心薬であるピモベンダンの使用が有用であった症例を経験したので報告する。

4. 当院における黄色ブドウ球菌敗血症の3例検討

若林宏樹

指導医：松澤康雄 (Aグループ), 館野冬樹 (Eグループ)

黄色ブドウ球菌敗血症は致命的経過を辿る重症感染症である。当院で Intensive Care Unit (ICU) 管理となった黄色ブドウ球菌敗血症を3例経験した。これらの経過を整理し、今後の検査計画や初期治療について文献的考察を交えて報告する。

5. 下垂体前葉機能低下症と仮面尿崩症を合併した IgG4 関連下垂体炎が疑われた1例

柴本麻衣

指導医：番典子 (Bグループ)

66歳男性。汎下垂体機能低下症にて発症し、頭部 magnetic resonance imaging (MRI) にて下垂体の腫大、IgG4 高値を認めた。視野障害を認めていたことから速やかにステロイド治療を開始する必要があるため、生検を施行しておらず確定診断には至っていないが、臨床的に強く IgG4 関連下垂体炎を疑う1例を経験したので報告する。

第 VII 部 平成 27 年度優秀論文賞 (白井賞) 14:20~14:40

基調講演と表彰

座長：榊原隆次 授与：白井厚治

佐藤悠太

Cardio-ankle vascular index is independently associated with future cardiovascular events in outpatients with metabolic disorders

Sato Y, Nakayama D, Saiki A, et al.

J Atheroscler Thromb DOI: <http://doi.org/10.5551/jat.31385>

第 VIII 部 佐倉病院のめざすところ (発表 10 分) 14:40~15:40

座長 齋木厚人

佐倉内科がめざすところ

鈴木康夫

大学病院における内科医に対しては、研究・診療・教育に対し高い専門性が求められるのは言うまでもないが、診療に関しては以前にもましてあらゆる病態を理解し対応できる柔軟性と総合性が同時に求められる時代になった。われわれ佐倉病院内科学講座は発足当初から、専門性を縦糸に、総合性を横糸にして編みこまれた人材育成をモットーに運営を行ってきた。今後も世界標準の専門性を研鑽し、同時に柔軟な臨床能力を有する内科医を育む医局運営を心掛ける所存である。

医局員は全て、“志は高く、目線は低く”をモットーに精進して頂きたい。

1. A グループ (呼吸器・免疫・アレルギー)

呼吸器内科のめざすところ

松澤康雄

開院以来、当グループは富岡教授を中心とする、アレルギー・膠原病グループに呼吸器内科が加わる形で始まった。しかし、アレルギー・膠原病の専門医が不在となり10年が過ぎた。今年、ようやく、膠原病専門医の熊野浩太郎医師を迎えることとなった。当グループの診療レベル、守備範囲は一層広がったと自負している。今後はさらに「感染症」にも力を入れたい。

教育については、単に呼吸器疾患を学ぶのではなく、感染症、アレルギー、悪性腫瘍、全身管理などの臨床医学の基本を呼吸器疾患の診療を通じて幅広く学ぶことを念頭に置いて行ってきた。しかし、理想にはまだまだ遠い。

研究面では2012年より開始したプロジェクトの成果がでてきて、原著論文も少しずつ執筆され始めた。他のグループははるか先方を走っているが、背中は見えてきた。そう、もうすぐ追いつくはずである。

B グループ (糖尿病内分泌代謝)

糖尿病内分泌代謝センターこの1年と来年への課題

龍野一郎

赴任して早くも5度目の佐倉病院内科学講座の例会の開催を迎え、毎年のことながら1年の時間経過の早さに驚きます。その一方、例会を迎えると、この1年自分が何をやってきたのか？ 日ごろの時間に押し流されず、われわれが一般病院と異なった大学病院に所属する者として、どんな医学の進歩に貢献をしたのか？ それを厳しく自分に問いかける機会ともなるわけです。

今年、糖尿病内分泌代謝センターでは臨床面では重点的に頑張ってきた肥満外科治療の症例数が全国の大学病院の中でNo. 1となり、学術面では10月までに昨年と同様7つの英文論文がpublishまたはacceptされ、4つの国際学会・会議、国内の主要12学会で多数の発表が行われましたが、数に満足せず、今後とも世界に誇れる研究を出していく必要があります。

われわれ、糖尿病内分泌代謝センターはそのミッションである、「地域に信頼される専門・先端診療の実践」、「疾患の分子病態解明とそれに根差す臨床研究の推進」、「総合内科臨床能力を持つ専門医・臨床研究者の育成」を常に心に留め、グループ一丸となって進んで行きたいと思えます。

最後に日頃よりわれわれのグループの活動に理解いただき、支えていただいている鈴木康夫教授、野池博文教授、東丸貴信教授、武城英明教授をはじめ、内科学講座の先生方に感謝します。

C グループ (循環器)

循環器内科のめざすところ

野池博文

昨年は安穏としたわが循環器に黒船の来襲に匹敵する大いなる2つの衝撃が走りました。1つは循環器内科(当科)に大森病院、大橋病院からの派遣医師をお迎えしたことであり、もう1つは新たな心臓外科の先生をお迎えしたことです。これら2つの異文化交流はあらゆる意味で大いに刺激になっています。さて、当科の中核をなすカテーテル分野では365日、24時間体制は極めて良好に機能しておりますし、心臓リハビリ、sleep apnea syndrome (SAS)、深部静脈血栓等に関して今や特別な治療や疾患ではなく、極めて身近なものになっています。これは多くの症例に対する科学的解析と、絶え間のない努力と啓蒙の結果といえます。

当科の更なる飛躍のためにいまだ充実していない不整脈 ablation や経皮的弁形成術等、多くの課題があり、可能性があります。これらに対する技術・知識の追求は極めて重要であります。同時に当科から発信するOnlyOneの技術や概念が重要と考えます。どんなに些細なことでも世界の誰も考えていない技術や現象の発見は何にも代え難い自己満足があり、この自己満足がひいては臨床に生かされたら最高です。皆さんも気づいていると思いますが当科では自由闊達な環境が用意されています。この環境こそ、OnlyOneが育つ環境と考えます。

循環器のめざす究極な目標は世界におけるOnlyOneです。

D グループ (消化器)

消化器内科のめざすところ

高田伸夫

消化器班では、スタッフの成熟によって内視鏡診療が充実し、地域からの紹介患者も増加してきている。しかし、検査能力はそろそろ限界に達し、検査の待ち時間は改善するどころか年々悪化の一途をたどっており、この解決が急務である。特に内視鏡に変わる検査の体制づくりは必須であり、より多くの人たちの協力を得るべく準備を進めている。一方で、治療の進歩が入院疾患の構造変化をもたらし、適切な人材配置の見直しも必要となってきており、各疾患のデータベースを再構築して、より効率的な医療・教育を具現化し、常に最善の医療と研究を達成すべく今後もわれわれの挑戦は続く。

E グループ (神経内科)

神経内科着実な1歩へ

榊原隆次

E チームは「6+1名で内科3本柱のできる限りのことをやってみよう」にて、毎朝の救急カンファランス、岸 雅彦先生は病棟重鎮として広くコンサルトを頂き、露崎洋平先生は手堅く研究を進め、館野冬樹先生・館野広美先生(2015.4月)は病棟指導の中心として活躍し、相羽陽介先生(2015.4月)は目の前の患者さんと取り組み、心理の尾形 剛先生は、院内・院外の認知症患者さんの検査(認知症疾患医療センター)をして下さっています。榊原は佐倉発の「パーキンソン病の膀胱治療ガイドライン」(欧州チーフを務めております)を発刊しました。発信では、2014年度のシンポジウム・ランチョンセミナー3回、英論文8編、和文10編、著書6冊でした。今後ともどうかよろしくお願いいたします。

第IX部 特別講演 15:50~16:50 座長:鈴木康夫

特別講演講師担当:吉松安嗣(副医局長)

講師:溝口充志 先生

久留米大学医学部 免疫学講座主任教授

演題:IBD治療に向けたコンピューター医学の展望

溝口充志先生 ご略歴

1989年2月 第83回医師国家試験合格
 3月 久留米大学医学部医学科 卒業
 5月 医師免許証取得
 6月 久留米大学医学部研修医 第一内科(1997年3月31日退局)
 1992年7月 肝臓免疫研究のため病理大学院在学中に米国ハーバード大学医学部免疫病理へ留学
 1993年3月 医学博士の学位授与
 久留米大学大学院医学研究科入学病理学 修了
 1997年4月 ハーバード大学医学部病理 Instructor
 1999年9月 マサチューセッツ総合病院 炎症性腸疾患研究センター 主任研究員(~2014年)
 2003年10月 ハーバード大学医学部病理 Assistant Professor
 2010年4月 久留米大学医学部 客員教授(~2014年)
 2011年2月 ハーバード大学医学部病理 Associate Professor
 2014年2月 久留米大学医学部 免疫学講座 主任教授(~現在)

所属国際学会

1996年9月 米国免疫学会(~現在)
 米国消化器病学会 Council Reviewer(~現在)
 1999年1月 国際粘膜免疫学会 Extramural Programs Committee(~現在)
 2005年7月 米国クローン病と腸炎学会 Study Section Member(~現在)
 2015年7月 日本消化器免疫学会 理事(~現在)

その他 雑誌編集委員等

2005年7月 米国免疫学会機関誌 Journal of Immunology, Associate Editor(~2009年6月)
 2006年7月 米国消化器病学会機関誌 Gastroenterology, Editorial Board(~現在)
 2007年4月 日本消化器病学会機関誌 Journal of Gastroenterology, International Editorial Board(~2014年)
 2013年7月 Current Immunology Reviews 編集委員(~現在)
 2014年4月 日本消化器病学会機関誌 Journal of Gastroenterology, Associate Editor(~現在)

賞罰等

1988年4月 久留米大学医学部医学科 6年生時特待生
2002年1月 Trisha & Patrick Duval Research Award
2009年5月 Top Reviewers in Gastroenterology
2011年5月 Top Reviewers in Gastroenterology and Hepatology

第 X 部 研修医発表表彰式 16:50~17:10 松澤康雄

閉会の挨拶 野池博文教授 (17:10~17:20)